

税金があること

所沢市立上山口中学校

二年 兵頭 愛海

小学生の登下校時、通学路にはよく地域の方がボランティアで見守りで立っている。児童たちはもちろんのこと、通勤・通学などで道行く人々に明るく「おはよう」や「行ってらっしゃい」「おかえり」などと声をかけている。それぞれの学校や地域で、名物おじいちゃん・おばあちゃんとなっているところもそう少なくないのではないだろうか。これは地域ぐるみで子どもたちを見守る意識を向上させるとともに、その地域を明るく活気あふれる街にする効果が期待でき、とても良いと私は思っている。そんな名物おじいちゃんたちの生活を支えているのが、年金だ。老齢などの一定の条件を満たした人に対し、毎年一定金額を定期的に給付する制度のことで、その財源の中心は税金だ。つまり、普段人々が納めている税金によって、高齢の方の生活は成り立っているのだ。

私たちのような中学生や小学生の教育費も、税金で賄われている。子どもひとりが小・中学校の九年間の義務教育を受けるのに必要な金額は二百万を超えるが、これも税金が使われ負担される。市区町村ごとに一定の年齢まで医療費が保障されることも身近な話だ。

これらから分かるように、税金というのは、私たち国民が安心して豊かに暮らしていくために利用されている。人々は、税

金を通して互いに支え合いながら生活しているのだ。しかし、問題もある。それは、年々人ひとりに対する負担額が増えているということだ。一度上げてしまった金額は、ほとんど下がることはない。納税によって普段の生活が苦しくなっては本末転倒だ。だからこそ、みんながもっと税について興味を持ち、その意義について理解を示すことで、生活が豊かになっていくのだと思う。

私は今も、登下校時に見守ってくれていた方たちに感謝している。近くで寄り添ってくれる人がいるというのはとてもうれしかった。そんな地域や人々の温かいつながりをうみ出すことこそ、日々国民が納めている税金の本当の価値なのではないだろうか。